

『浪人青年はかく語られし』

序章

清水 克洋

『絶望しているものの顔を見れば、誰しも陽気になるものだ。』

——今日も一日が終わる。

予備校の六限目の講義終了を冬海切人は、いつも通り迎えていた。

「……尻痛え」

ゆっくりと身を起こし、尻から腰にかけての鈍い痛みで切人はぼやく。夏期講習の宣伝して授業料かき集めるのもいいけど、その前に椅子を柔らかくして欲しい。生徒が勉強する環境を整えるのも、営業努力だろう、と誰に言うでもなくぼやいた。

姿勢が悪かったのだろうか、首筋の辺りまで痺れている。首を回すとゴキリと重い音がする。切人はなんとなく、その場で立ち尽くしたままぼんやりとした。そこでようやく脳が覚醒し始め、周囲の喧騒が聞こえてくる。

「みんな、今日どうする？」「そだねえ、たまにはカラオケでも行く？」「あー、なんとなく気分じゃねー」「俺もー。なんか今日ダルいし」「あはっウケるう！ ユートン、いつもダルいじゃん」「や、俺だって本気出してないだし」「俺たちはお前の本気をいつになつたら見れるんだ？ って思うがな」「あく、じゃあとりあえずボスでも寄ってく？」「え、けどさあ、ボス高くない？ パクドの方が助かるなあ」「ま、いっか。とりあえずその辺の店であつてことごとく」

予備校帰りにファストフード店で、知性の欠片もない駄弁りとはまったくいいご身分だ。切人は内心で毒づきつつも、教室の入り口付近の席で群がる男女の群れに軽く会釈しながら扉をスライドさせる。一瞬だけ、群れの中心に座ってる女子と目が合うが、切人は彼女にも、内心と裏腹の愛想笑いだけを向けてすぐに教室を出た。

風見絆愛。

まるで、いつも周囲に向けて振りまいているその柔らかな笑顔を反映したかのような、柔らかなセミロングヘアが揺れていた。愛嬌のある丸顔は常時楽しげな表情を浮かべている。

そんな彼女は今日も、「いいご身分」な集団の中心で笑顔を振りまいている。

絆愛は、切人と高校三年生の時も同じだったはずの少女だ。それが何の因果か、今年から入学したこの予備校の教室でも同じになってしまった。目が合った時、絆愛がぼわんとした微笑みを浮かべた気がしたが、切人は気にしない。高校時代から、少なくとも切人は彼女とそこまで親しく会話した記憶はない。そもそも、切人は、手当たり次第に他人との繋がりを